小児科	血友病
小児科	クリスマシン
内科	壊死
産科	血友病患者の手術（だったと思う）
産科	弛緩出血　ＤＩＣ
産科	産科出血、妊娠中毒症
小児科	新生児メレナ
血液内科	クリスマシン
産科	血液疾患

※問 2-③で「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問

● 問 3 S3-2. 各製剤の治療効果

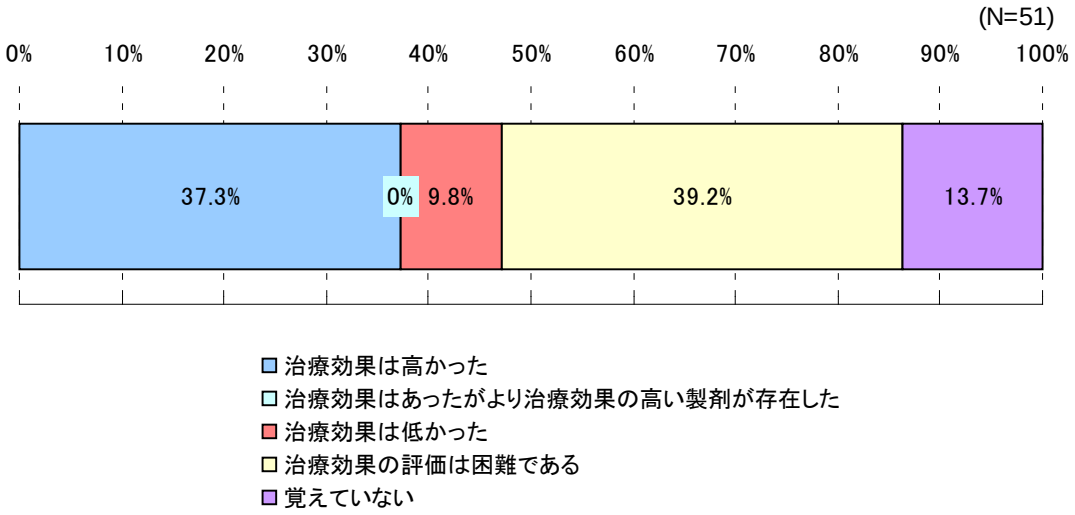
➢ 各製剤の治療効果については、使用経験のある医師のなかでの評価としてはフィブリノゲン製剤で 4 割、フィブリン糊で 7 割、第Ⅸ因子複合体製剤で 5 割が「療効果は高かった」と回答している。

● 問 3 S3-2-①. フィブリノゲン製剤の治療効果

➢ 「治療効果の評価は困難である」が 39.2%、次いで「治療効果が高かった」が 37.3%であった。より治療効果が高い製剤が存在したという回答は無かったが、約 10%が「治療効果は低かった」と回答している。

問 3 S3-2. 治療に使用した時点での各製剤の治療効果に関する評価をお聞かせください。

①フィブリノゲン製剤



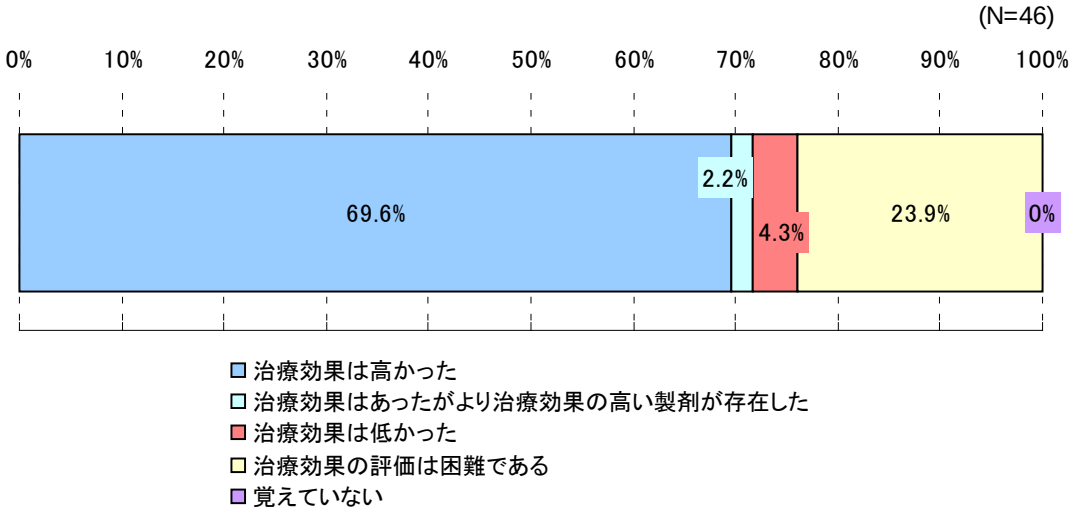
※問 2-①で「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問

● 問 3 S3-2-②.

フィブリン糊の治療効果

➢ 「治療効果が高かった」が約 70%と他の製剤に比べて多かった。「治療効果はあったが、より治療効果の高い製剤が存在した」と回答した方は、より治療効果が高いものとして「開腹手術」と記載していた。

問 3 S3-2. 治療に使用した時点での各製剤の治療効果に関する評価をお聞かせください。
②フィブリン糊



※問 2-②で「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問

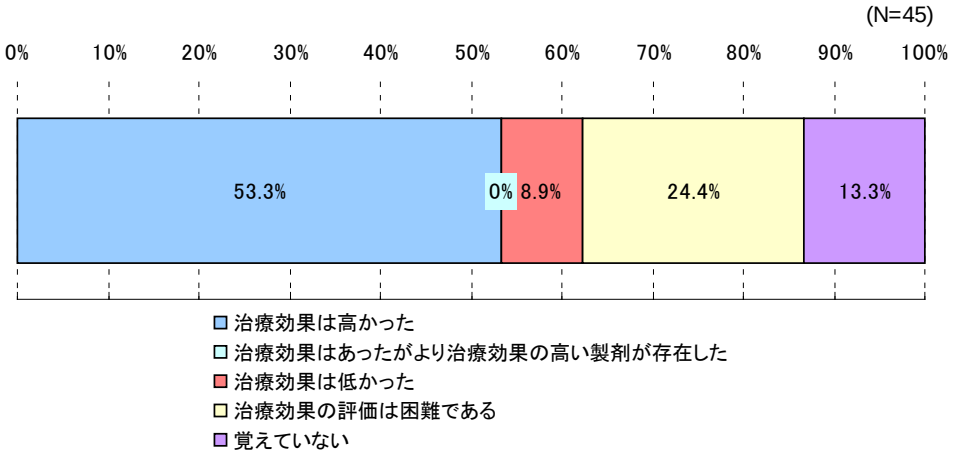
● 問 3 S3-2-③.

第Ⅸ因子複合体製剤の治療効果

➢ 「治療効果は高かった」との回答が半数超であるが、「治療効果は低かった」との回答も 10%程度あった。

問 3 S3-2. 治療に使用した時点での各製剤の治療効果に関する評価をお聞かせください。

③第Ⅸ因子複合体製剤



※問 2-③で「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問

● 問 3 S3-3-①. 各製剤の予防的使用

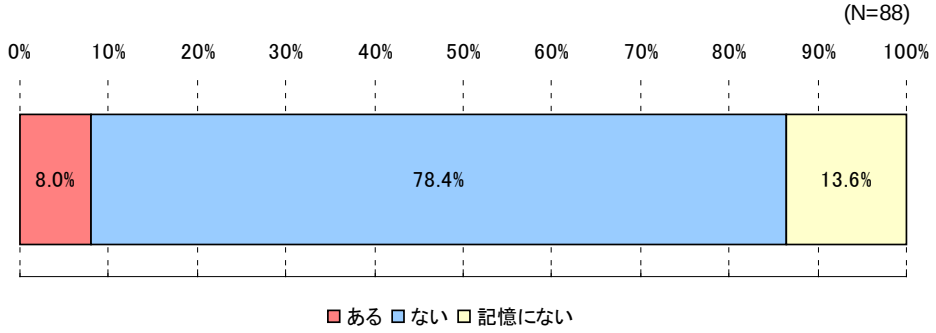
➢ 予防的使用をしていた割合は、フィブリノゲン製剤、第IX因子複合体製剤では約 1 割だが、フィブリン糊では約 2 割であり、同製剤の効果を高く評価している医師が少なからずいることは明白である。

● 問 3 S3-3-①. フィブリノゲン製剤の予防的使用

➢ 10%弱の医師に予防的な使用経験があった。

問 3 S3-3. それぞれの製剤を予防的に使用したことはありますか？

①フィブリノゲン製剤



※問 2 で①フィブリノゲン製剤、②フィブリン糊、③第IX因子複合体製剤のいずれかについて「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問

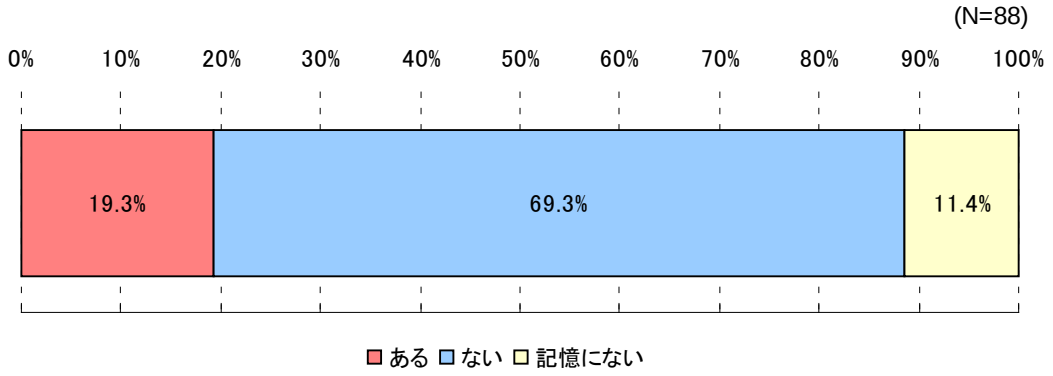
● 問 3 S3-3-②.

フィブリン糊の予防的使用

➢ 約 20%の医師に予防的な使用経験があり、他の製剤より予防的な使用をしていた割合が高い。

問 3 S3-3. それぞれの製剤を予防的に使用したことはありますか？

②フィブリン糊



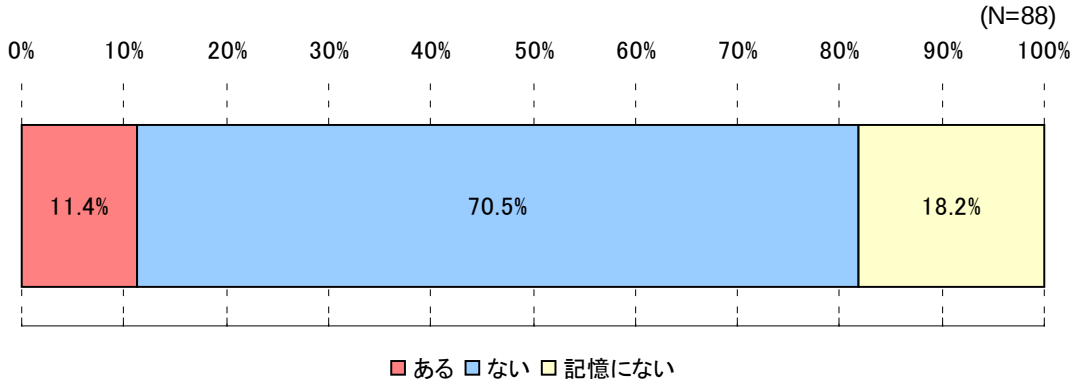
※問 2 で①フィブリノゲン製剤、②フィブリン糊、③第Ⅸ因子複合体製剤のいずれかについて「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問

● 問 3 S3-3-③.

第Ⅸ因子複合体製剤の予防的使用

問 3 S3-3. それぞれの製剤を予防的に使用したことはありますか？

③第Ⅸ因子複合体製剤



※問 2 で①フィブリノゲン製剤、②フィブリン糊、③第Ⅸ因子複合体製剤のいずれかについて「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問

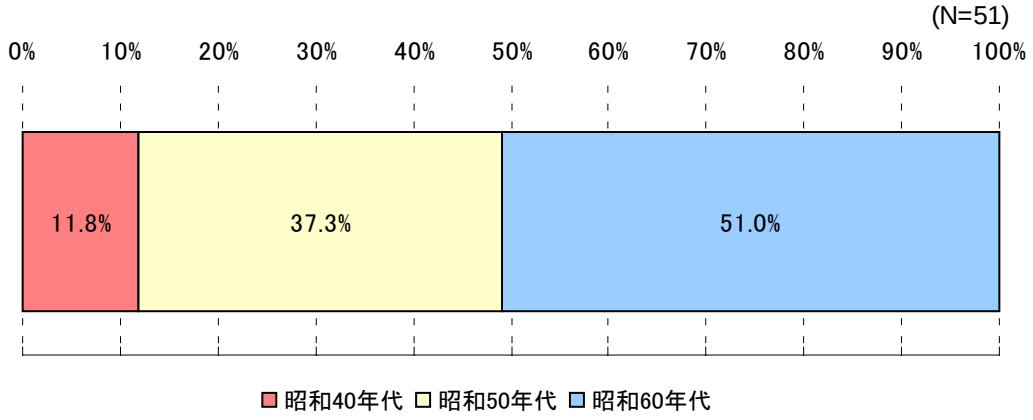
● 問 3 S3-4.

フィブリノゲン製剤の主な使用時期

➢ フィブリノゲン製剤を最も使用していた時期は、昭和 50-60 年代が約 9 割、昭和 40 年代が約 1 割であった。

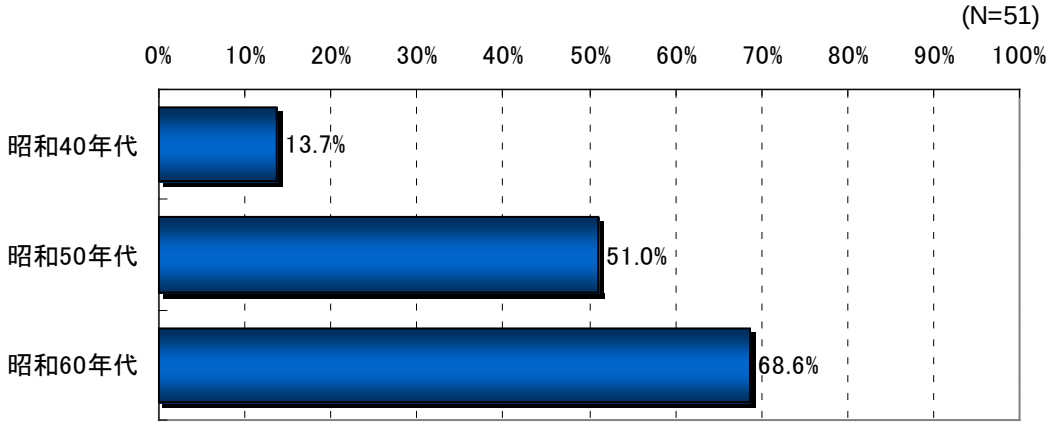
これは使用が年代を追って拡大したというより、回答している医師の活動時期として昭和 40 年代が極端に少ない事の影響が大きいと思われる。

問 3 S3-4. フィブリノゲン製剤を主に使っていた年代はいつですか？
一番多く使っていた年代に◎をつけてください。



※問 2-①で「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問
最も使用した時期を集計

問 3 S3-4. フィブリノゲン製剤を主に使っていた年代はいつですか？
一使っていた年代に〇をつけてください。



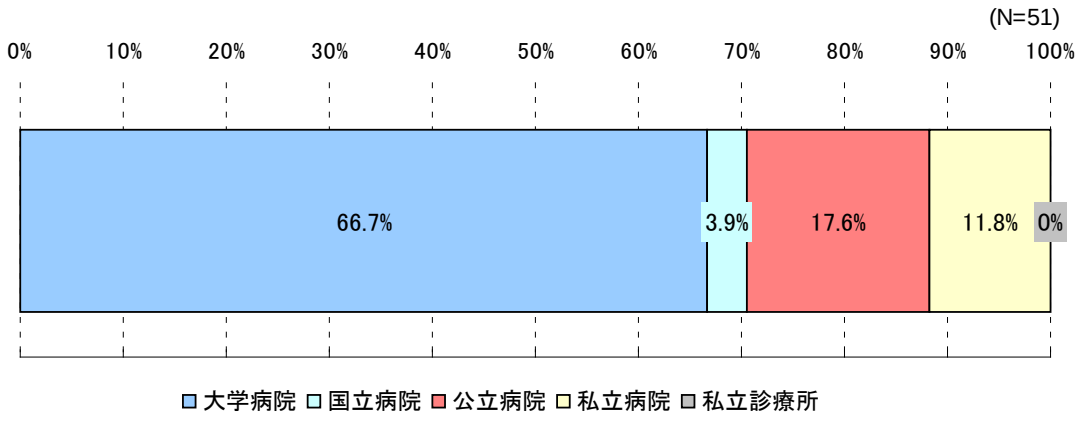
※問 2-①で「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問
使用した時期すべてを集計

● 問 3 S3-4-1.

フィブリノゲン製剤使用時の所属病医院

➢ フィブリノゲン製剤使用時の所属病院では大学病院が 7 割、国公立病院 2 割、私立病院が 1 割と大学病院が突出している。

問 3 S3-4-1. 上記S3-4 で◎と回答した年代に所属していた病医院の種別をお知らせください。



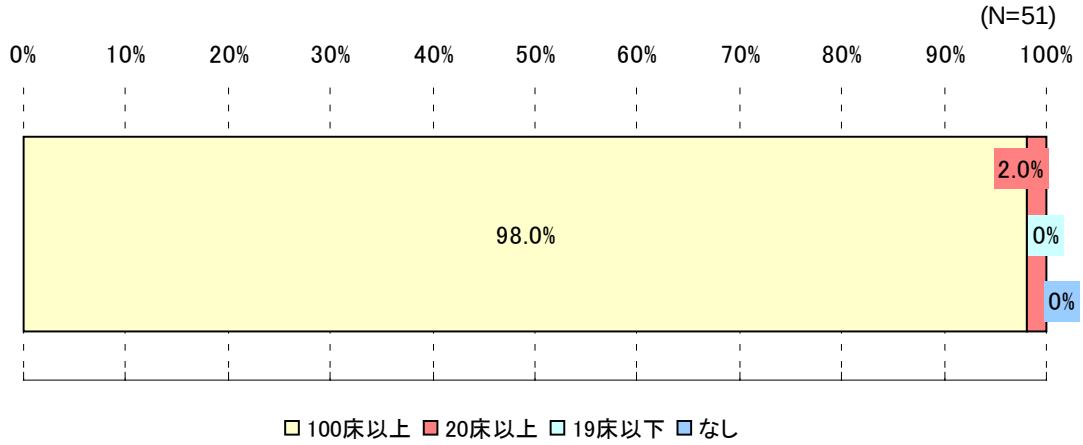
※問 2-①で「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問

● 問 3 S3-4-2.

フィブリノゲン製剤使用時の所属病医院の病床数

➢ フィブリノゲン製剤使用時の所属病院の病床数は 98%が 100 床以上であった。

問 3 S3-4-1. 上記S3-4 で◎と回答した年代に所属していた病医院の病床数をお知らせください。



※問 2-①で「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問

● 問 4. 各製剤の代替治療の有無

➢ フィブリノゲン製剤、第Ⅸ因子複合体製剤は昭和 50 年代から昭和 60 年代にかけて輸血用血液確保や、加熱製剤などの代替医療への移行が進んだが、フィブリン糊に関しては進んでおらず、フィブリン糊の有用性の評価が比較的長く続いている事が見てとれる。

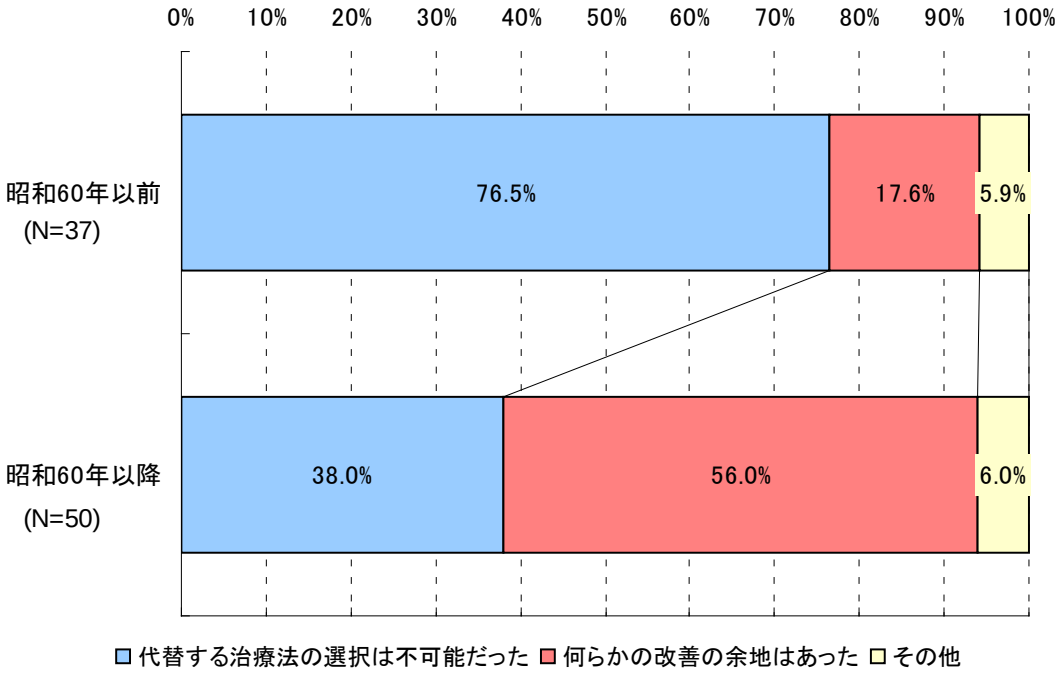
● 問 4 S4-1-①および S-4-1-②.

フィブリノゲン製剤の代替治療法の有無

➢ 昭和 60 年以前は 20%に満たないが、昭和 60 年以降では半数以上が「何らかの改善の余地はあった」と回答している。

問 4. 当時、上記製剤の使用は非A非Ｂを始めとするウイルス性肝炎のリスクが存在したわけですが、現在から当時を振り返ってみて、何らかの代替療法によって肝炎罹患リスクを低減する可能性があったとお考えですか。製剤毎に当時のご認識をお答えください。

①フィブリノゲン製剤



※問 1 で該当年代に治療行為を行っていたと回答し、かつ問 2-①で「使用経験 10 例以上」または「使用経験 1~9 例」と回答した方に対する質問